

分科会 B 「維新」の思想

総括

小風 秀雅

本分科会では、日本あるいは東アジアの近代化の問題を思想史的側面から採り上げた。思想史的側面といっても狭い意味での思想史ではなく、近代化にともなって生じたいわゆるパラダイムの転換が、ものの考え方の上にどのように発現したのか、という問題を国際的視点から考えてみようとしたのである。

報告者に3人の海外の研究者をお願いしたのは、すでにこうした問題については国内では数多くの研究蓄積があり、研究状況としては飽和点に達している状態にあり、新たな視点の導入が必要であること、その場合、かなりの研究蓄積があるにもかかわらず日本国内ではほとんど顧みられてこなかった海外での研究視点を採り入れることが可能な分野であること、がその理由である。

ジョン・グリーン氏は、万国公法的な世界観に基づいた欧米流の謁見儀礼がはじめて導入された明治初年の天皇と外国使臣との謁見儀礼を採り上げ、そのことの政治的、外交的意味を指摘された。すなわち、この謁見により天皇は伝統的な大君ではなくいわば「西洋的天皇像」とでもいうべき西洋型の君主としての像が形成されていったこと、従来の儀式に基づかない新たな儀式が行われることにより、必然的に中華体制に代表される伝統的権力関係が破壊され新たな万国公法的権力関係が発生したこと、などである。

日本史において、儀礼論自体は決して目新しいものではないが、近代の外交儀礼について本格的に問題にされたのは今回がはじめてであろう。儀礼からみるという手法は、極めて斬新であるとともに基本的なものであり、日本側の研究者は盲点を突かれたような感を抱いたのである。さらにこの問題は、欧米との関係に止まらず、琉球を含めた日本とアジア諸国との外交関係を論ずる場合にも重要な意味を持つものであり、当日もこの点が議論となったが、グリーン氏は議論を踏まえて充実した原稿を寄せられた。

ダビッド・ラブス氏は、和魂洋才の体現者ともいうべき佐久間象山の思想を実用性という視角から採り上げ、自然科学に対する理解の深さを見るのではなく、それを如何に政治的・実用的な観点から理解し応用しようとしていたのが、という点が重要であること、そしてそうした姿勢こそが、倫理の付属物であった自然科学の独立を果たしたヨーロッパにおける科学観と同様のものであったことが重要であると指摘された。和魂洋才という二元対立的な理解では、象山がどの程度まで深くあるいは正しく西洋の自然科学を理解していたのか、という点が問題となりがちであるが、ラブス氏は、理解の程度ではなく理解の姿勢に着目し、科学の実用性に注目した象山の姿勢は、日本における近代的な科学観の成立につながるものとして評価されている。

象山における時代的限界ではなく、近代的な精神形成の可能性を見いだそうとしている姿勢は、素直に納得させられるものであり、こうした視点からもう一度アジアにおける西学受容の問題を問いなおす必要があることが実感されたのであった。残念ながら時間の関係もあって、当日の質疑応答ではこ

の点はあまり明確にされなかったが、その後の討論を踏まえて、ラブス氏も明快な原稿を寄せられた。

尹素英氏は、明治維新の思想に照応する朝鮮における開化思想を採り上げ、伝統的国家観に対抗して開化派が対外開放政策を樹立する際に、万国公法における「均勢之法」が重要な契機となったことを指摘された。「均勢之法」とは、国家の独立は軍事経済的な自立ではなく勢力均衡によってもたらされるとして、道義を遵守し西欧的な文明開化を推進することで国家の自立を保持することができることを説くものであり、日本において理解された弱肉強食の論理とは基本的に異なる思想であった。氏は、この思想の背景に伝統的な「事大政策」が存在することを指摘し、この国家観の差がその後の両国の近代化の分岐点になったと主張したのである。

伝統的国家観は、国家間の個別性よりも文化的な等質性を重視しており、物理的な基盤の違いは軽視されており、開化派が変革の思想として「均勢之法」を主張する革新性は国家という主体を明確に意識した点にあることも、同時に指摘されている。

日本の維新と朝鮮の開化という変革の思想を比較するというアプローチは、維新史研究からはなかなか出てきにくい発想であり、外国からの発言として傾聴に値する報告であったといえることができる。当日の準備原稿はもっと膨大なものが用意されていたのであるが、今回は論点を比較に絞ったコンパクトな原稿が寄せられた。今後、さらに包括的な論文が提出されることが期待される。

当日は、松尾正人氏、三谷博氏をはじめ多くの維新史研究者が学外から参加され、活発な質疑応答が行われた。三氏とも日本での学会報告は初体験に近く、緊張しておられたようであるが、会場の熱気に触発されてか意欲的な発言が多く飛び出した。この報告集の原稿はそうしたシンポジウムの成果をまとめられたものであり、ごらんのように充実したものとなったのは、当日の討議に依るところが大きい。その意味では、本分科会は成功であったと思われる。今後また機会を見て、第二段を企画したいと考えている。